

焼津市の通級指導教室（ことばの教室・まなびの教室）の担当者として、多くの子ども達を支援してこられた荒井久美子先生に、特別支援教育で大切にしたいことや、一人一人の特性に応じた支援のヒントについて、わかりやすい言葉で書いていただきました。



## 「普通」とはなんだろう？

私は、右利きです。今、私が生きている世界は、右利きの人に便利な仕組みの世界となっています。なぜかという、右利きの人が多いからです。多い人の側に照準を合わせた仕組みを作っておくことのメリットは大きいからです。

そこで、ふと、こんなことを考えました。「もしも左利きの人に便利な仕組みの世界に私が生きていたら…？」はさみも包丁もほかの物も、左利きの人に照準を合わせた作りとなっており、きっと私は、使いにくさを感じながら、左利きの人に合わせた作りとなっている道具を使うしかないのだろうな。左利きの人に便利な仕組みの世界を生きる右利きの人々の苦勞は、左利きの人になかなか理解されずに生きていくのだろうな。

私は、何年か前にもこんなことを考えていました。この時は、教育の場で特別な支援を要する児童生徒を思い浮かべながらのことでした。

「普通」とはなんだろう？

「自分の普通」と「他人の普通」はちがう。

「普通」とは、大多数の側をさすことが多い。

少数派は「普通ではない」と分類される。

少数派は理解されにくい。

人はみな、自分を「普通」と感じている。

自分と似たものは受け入れやすい。

自分と違うものは受け入れにくい。

多数派ではない考え方、感じ方、行動様式を示すことの多い人は、

自分のやり方が他人に理解してもらいにくいという制約の中で

生きている。



この考え方は、私が現在関わっている発達に特性のある子ども達のことだけでなく、私のまわりにいるすべての人達との関わり方に共通していることなのだと思います。マイノリティな面がある方の生きにくさや困っている気持ちを理解することは、適切な支援や関わりを提供することに繋がると考えます。

そして、自分とはちがう価値観をもつ人達を「変だ」「異常だ」と思わない感性を持ち続けたいと改めて思います。